

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590138

研究課題名(和文) 応用演劇に基づくホームレスの就労自立支援に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) Social psychological study on homeless people's working and independence support based on applied drama

研究代表者

藤本 学 (Fujimoto, Manabu)

立命館大学・教育開発推進機構・准教授

研究者番号：00461468

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ホームレスの就労自立に必要な4つの社会適応スキル(社交性・機転性・不当受容・不正受容)を測定する尺度SWITCHを開発した。また、就労支援センターの要望を受け、在所者のうち精神科に自閉症スペクトラムの診断を仰いだ方がよい人とその必要のない人を識別するための発達障害1次スクリーニングテストを作成した。

フォーラムシアターの技法を基に、ホームレスの社会適応スキルをトレーニングする方法を開発し、実施した。3年間の実践データを元に、プログラムおよび実演するシナリオの改良を図った。最終年度に実施したトレーニングプログラムが、ホームレスの社交性・不当受容・不正受容を改善する効果を持つことが確認された。

研究成果の概要(英文)：The "SWITCH" to measure social aptitude skills necessary for homeless people's working and independence were developed. These scales consisted of four factors as sociability, wittedness, inequitable treatment receptivity, cheating receptivity. In addition, Due to a demand of the working support center, a primary screening test of developmental disorder was devised. This test is utilized to distinguish whether an inmate should receive a diagnosis of a psychiatrist.

Based on the forum theater, a program to train homeless people's social aptitude skills was developed, and this was carried out for 3 years while refining procedures and scenarios. It was confirmed that the final version of the program had an improving effect on three skills as sociability, inequitable treatment receptivity, and cheating receptivity.

研究分野：社会心理学

キーワード：ホームレス 社会適応スキル フォーラムシアター 就労自立支援 スキルトレーニング SWITCH

## 1. 研究開始当初の背景

野外生活を強いられている不定就労者、いわゆるホームレスは全国に約1万人存在することが分かっている。ホームレスの就労自立支援は各自治体で行われているが、就職に必要な住所の提供と職業の斡旋など、その大部分が社会的支援である。

ホームレスの多くは仕事が長続きせず、離職を繰り返す。そのため、安定した収入が得られず、結果として野外生活を強いられることになる。このようなホームレスになったホームレスには、性格・能力・知能といったパーソナリティ要因、就労に対する動機づけ、社会や就労に対する態度、また自尊感情などの心理状態の悪化という社会不適応を招く固有の社会心理学的問題がある可能性が高い。本計画案を作成するための事前アンケートでも、“コミュニケーション動機の欠如”・“要領が悪い”という社会性の問題、および“他罰的で妥協できない”・“自分を律することができない”という人格上の問題が浮き彫りになった。これらが社会的不適応行動を誘発し、それによる失敗経験がホームレスの自尊感情を著しく損なっている実態が推測される。したがって、ホームレスの就労支援には社会心理学的な問題の解決が不可欠であると考えられる。

そこで本研究は、社会心理学的見地から、ホームレスの社会的能力の向上と自尊感情の回復に向けた基礎理論の確立と効果的な支援の開発に取り組む。社会適応スキルを涵養し、自尊感情を回復することによって、ホームレスの就労自立を支援することは、現在の社会情勢からも喫緊の課題である。

## 2. 研究の目的

(1)ホームレスの社会不適応タイプの特定：トレーニング効率を上げ、参加者の心理的負担を軽減するためには、画一的ではなく、対象者の適性に応じたプログラムを選択することが有効である。そのためには、対象者がどのような問題を抱えているのかを特定しなければならない。そこで、ホームレスの社会適応における社会心理学的問題のタイプを特定する。ホームレスの不適応タイプの特定は、基礎理論の構築に留まらず、最適なスキルトレーニングプログラムを考案する上でも不可欠なステップである。

(2)ホームレスの不適応タイプに応じた演劇ベースドトレーニングプログラムの確立：本研究では、スキルトレーニングプログラムとして、応用演劇という新たなパラダイムに着目する。応用演劇は、演劇のノウハウを学びの手法として取り入れる考え方である。演劇には役者から裏方まで複数の人間が関わる。そのため、コミュニケーションが不可欠な状況を生み出す。準備や稽古、劇中において生産的なコミュニケーションを重ね、これまで体験することのなかった役割を演じることなどにより、人間社会に適応する上で貴重な

経験を得ることができる。自分ならどう振る舞うかを、安全な環境で考えることができるという演劇の特性は、実社会をシミュレーションする参加・体験型の教育環境を提供する。まだ広く周知されているわけではないが、近年、教育現場を中心に演劇的手法が徐々に取り入れられつつある。ただし、実践のみが先行し、効果性の測定や心理学的な影響に関する検証は皆無である。そこで、本研究は社会心理学的な見地から、ホームレスにとって最適な演劇ベースドトレーニングプログラムの確立を目指す。

(3)ホームレスの社会不適応理由を明らかにすること：実際に極度の不適応を起こし、社会的に苦しい立場にいるホームレスは、実学的な社会心理学を目指す上で避けられない対象者である。ただし、ホームレスに対する心理学的調査は、対象者の問題などから容易ではない。本研究はこの問題に真正面から取り組む。社会不適応に陥っている以上、ホームレスには継続的な就業と生活を営む上で必要な社会適応スキルの問題があるのは明らかである。しかしながら、その実態は不明である。文化政策学者である研究分担者は、これまでの活動経験から、ホームレスには社会不適応においていくつかのタイプがあると実感している。本研究は、第一にこのホームレスに対する経験則を社会心理学的に実証することに挑戦する。

(4)演劇ベースドトレーニングという新しい手法を用いること：文化政策学領域とのクロスオーバーにより、“応用演劇”という未だ社会心理学において注目されていない分野に越境する。それにより、“演劇ベースドトレーニング”という斬新ながら効果が十分に期待されるスキルトレーニング・メソッドを生み出す。これまでのスキルトレーニング研究は、スキルは低いものの著しく社会生活に支障を来した対象者はあまり扱ってこなかった。本研究が対象とするホームレスは、もっとも深刻なレベルで社会的不適応状態を示している。継続的な正業にも就けず、野外生活を強いられるまでにスキルが低い対象者にとって、従来のスキルトレーニングがそのまま通用するかは疑わしい。本研究は演劇ベースドトレーニングという新たな方法論を提唱するにとどまらず、従来のトレーニングメソッドとの差異を明確にすることによって、スキルトレーニング理論全体の発展に貢献することを志している。

(5)前者の知見を元に、後者のトレーニングメソッドの最適化を図ること：研究代表者の対人コミュニケーションに関する複数の知見は、対象者の個性に応じたメニューを組み合わせる方が、トレーニング効率が高まることを示唆している。特にホームレスは非常に強い個性を持っていることが多く、特定のトレーニングに合う人とまったく合わない人の差が激しいことが容易に想像される。ただし、その都度対象者に適したトレーニングメニュー

ーを考えるのは、準備の簡便性、実施の安定性、効果の予測性の点で難がある。そこで、対象者のタイプ別にあらかじめプログラムを確立する。これにより、上記の問題はクリアすることができる。参加者のタイプ別に役割を与え、各自の役割に応じたトレーニングメニューを用意するのは、演劇的観点においてごく自然な発想である。この考え方を社会心理学のスキルトレーニングに導入するという着想が“不適応スキルタイプに応じた演劇ベースドトレーニング”の要点である。

(6)ホームレスの社会心理的な問題として自尊感情を軽視しないこと：研究分担者の活動経験から、ホームレスは自尊感情が著しく損なわれており、他者から肯定的な評価を受けることに飢えていることが多い。演劇ベースドトレーニングはトレーニングで終わらず、トレーニングの成果を劇という形に集大成する。それを観た他者（主に関係者）から、トレーニングの努力を肯定的に評価されることは、ホームレスの自尊感情を回復し、自らの能力に対する自信を深め、人生に前向きに取り組むようになると期待される。

(7)トレーニングプログラムの効果を保証すること：ファシリテータを担ってもらった研究協力者は現在、心理学的な理論背景もなく、効果も検証されていない応用演劇的取り組みを、ホームレスに対して試験的に実施している。しかしながら、本研究案作成のために行った事前アンケートでは、十分な効果が確認されていない。社会心理学的観点から効果性を検証し、プログラムの改善を図らなければ、ホームレスに何の恩恵も与えられないままに、この挑戦的な取り組みは立ち消えてしまう。

### 3. 研究の方法

ホームレスの社会的能力の向上と自尊感情の回復を図るために、4つの研究事項を順に扱う。

(1)社会心理学的見地からホームレスの心理的問題を解明：就労自立支援センターの在籍者を対象に、自由記述アンケートを行う。結果を整理して調査項目を作成し、質問紙調査を実施して尺度化を図る。

(2)応用演劇によるトレーニングプログラムを考案：フォーラムシアターを基に、社会適応能力と自尊感情が低いホームレスにとって精神的な負担のかからない、観劇と話し合いによるトレーニング手法を開発する。

(3)ホームレスに対するトレーニングプログラムの実用性を検証：著しい社会的不適応を起こしているホームレスにとって、演劇ベースドトレーニングと既存のトレーニングのプログラム上の利点と問題点を明確にする。

(4)不適応タイプに応じたトレーニングの効果性を検証：(3)を踏まえつつ、(2)で考案したプログラムを基本に、不適応タイプ別に数種類のプログラムを考案する。そして、(1)で開発した尺度によってタイプ分けしたホ

ームレスに対し、最適と思われるプログラムを課し、その効果性を検証する。

### 4. 研究成果

(1)2015年度：就労自立センターの在籍者に対し、発達障害傾向および心理状態に関する調査と職業適性検査（GATB）を、入所時に実施した。そして、フォーラムシアターの技法を用いたスキルトレーニングを行った。このトレーニングは、劇団員が対人関係に関わるさまざまな課題を含んだ社会生活におけるシーンを再現して見せるもので、各シーンで観察される様々な行動を演じ、トレーニング対象者に適切な行動とは何かの気づきを与え、考えさせるといったものである。

はじめに、調査分析については、就労自立センターの在籍者の中には、発達障害を持つ在籍者も少なからず存在する。彼らが社会人として自立するためには、発達障害に対する医療的ケアが不可欠である。そのため、在籍者の中から精神科につなぎ医療的ケアを受けた方がよい人を特定する必要がある。これまでGATBが用いられてきたが、コストの問題からこれにかわるスクリーニング方法が望まれている。そこで、発達障害傾向尺度を開発し、GATBが用いられてきたが、コストの問題からこれにかわるスクリーニング方法が望まれている。そこで、発達障害傾向を開発し、GATBとの関連性について検討を行った。その結果、社会性と推察力が欠如し、敏感・こだわりの薄い人が、能力的に就労に困難さを示した。ADHD傾向の多動性は活動性を、アスペルガー傾向の敏感さ・こだわりの強さは知的作業への適性と結びついていることから、この傾向の高い人は適切な職に就くことでその能力を発揮できるということを示唆している。そして、精神科につなぐ必要があるのは、社交性と知的能力の低い自閉症傾向にある在籍者ということが明らかになった。

つぎに、トレーニングについては、フォーラムシアターを受講した在籍者は、機転が利くようになり、他者の不正についても受容することができるようになった。これらの能力は「大人」として社会に適応するために必要な能力であることから、フォーラムシアターに基づくスキルトレーニングは、ホームレスの就労支援に有効であると考えられる。

(2)2016年度：スキルトレーニングについては、2014年度の後半から2015年度の前半までに実施した第1期は4回構成で行った。しかしながら、参加者の出席率が芳しくなかったため、内容の精選と参加者の負担軽減を図り、2015年度後半の第2期は2回構成で行った。その結果、参加者の参加率と満足感が向上した。

つぎに、質問紙調査については、以下の3つ研究を行った。1つ目は、実社会に適応するために必要なスキルの特定と、それらを測定する尺度SWITCHの開発である。2つ目は、

発達障害傾向（自閉症スペクトラム傾向）に対する精神科の診断を仰ぐ必要がある人を特定するための1次スクリーニングテストの開発である。このテストは現在我々が研究活動をしている就労自立支援センターにおいてすでに実施されており、センター長から高い評価を受けている。3つ目は、フォーラムシアターによるスキルトレーニングの効果性の検証である。この検証によって、フォーラムシアターは、社会適応の難しいホームレスのスキルを改善するというリメディアル効果を持っていることが明らかになっている。

さいごに、インタビューについては、ホームレスに対するフォーラムシアターが、従来演劇の特性と言われていた「共同性」、「客観性」、「虚構性」に加えて、「俯瞰性」、「遊戯性」という2つの特徴を持つことを明らかにした。

(3)2017年度：第1期と第2期の全9回のトレーニングから得た知見を元に、2016年度に実施する第3期のプログラムの改定を図った。改定版では、社交性、機転性、不当受容、不正受容の4つのスキルに関する問題を包括するシナリオを用いた。また、初日に従来型のスキルトレーニング、2日目にフォーラムシアターという構成を改め、両日とも異なるプログラムでフォーラムシアターを行うことにより、職場の問題場面に直面したときに状況を正しく捉え適切な行動を選択する力の定着を図るようにした。その結果、4つの社会適応スキルの内、社交性は全ての群で向上した。さらに、不当受容と不正受容はこれらのスキルが乏しい群で改善が見られた。機転性については今回のシナリオでは向上させることはできなかったが、2015年度以上のトレーニング効果を得ることができた。

また、インタビュー調査から、フォーラムシアターは参加者であるホームレスに第三者の視点を獲得させることが分かった。特に社交性の高い群は「自分が主人公や上司なら」と、想像力を働かせながら観劇していた。一方で、参加者の中には芝居に入り込めない人もいた。このような人は、演劇を「子どもだまし」と考え、ばかばかしいものに付き合わされている心境になっていた。以上、応用演劇の手法は客観的に状況を把握し、適切な行動に打ち手考える力を育むものの、演劇に馴染みのない者にとって心理的抵抗が働くことが明らかになった。このようなネガティブな意見を持つ人ほど社会適応スキルが低いことが多い。トレーニングの効果性の検証からは、フォーラムシアターはスキルの低い人に効果的であることが分かっている。すなわち、フォーラムシアターに対してネガティブな意見を持っている人でも、トレーニングに参加すればスキルは改善されるのである。

5. 主な発表論文等  
〔雑誌論文〕(計 3 件)

古賀 弥生, フォーラムシアターの応用によるホームレス就労自立支援の実践について, 演劇教育研究, 査読有, 7 巻, 2017, 印刷中

Manabu Fujimoto, Team Roles and Hierarchic System in Group Discussion, Group Decision and Negotiation, 査読有, 25 巻, 2016, 585 - 608

古賀 弥生, 演劇によるホームレスのためのコミュニケーション講座の実践と検証, 活水論文集文学部編, 査読有, 58 巻, 2015, 123 - 127

〔学会発表〕(計 8 件)

藤本 学, 観劇と議論を通じた双方向学習によるホームレスの社会適応スキルの改善, 日本社会心理学会第 58 回大会, 2017 年 10 月 28 日 ~ 2017 年 10 月 29 日, 広島大学東広島キャンパス (広島県東広島市)

古賀 弥生, フォーラムシアターによるホームレスの就労自立支援の展開, 日本アートマネジメント学会九州部会と文化経済学会 < 日本 > 九州部会の連携による研究発表会, 2017 年 3 月 18 日, 久留米大学福岡サテライト (福岡県福岡市)

藤本 学, フォーラムシアターによる不定就労者のスキルトレーニングの効果性検証 自閉症傾向と理不尽受容スキルに基づく分類, パーソナリティ心理学会, 2016 年 9 月 14 日, 関西大学 (大阪府吹田市)

古賀 弥生, フォーラムシアターによるホームレスの就労自立支援について, 日本アートマネジメント学会九州部会と文化経済学会 < 日本 > 九州部会連携による研究発表会, 2016 年 2 月 20 日, くるめりあ六ツ門 (福岡県久留米市)

藤本 学, ホームレスに対するフォーラムシアターの効果性に関するパイロットスタディ 自閉症スペクトラム傾向を踏まえた従来型スキルトレーニングとの比較, 人間科学研究所年次総会, 2015 年 11 月 21 日, 立命館大学 (京都府京都市)

藤本 学, ホームレスの就労自立支援に向けた発達障害傾向の1次スクリーニングテスト, 日本心理学会, 2015 年 9 月 22 日 ~ 2015 年 9 月 24 日, 名古屋国際会議場 愛知県名古屋市)

藤本 学, 社会に適応するために必要な SWITCH ホームレスの実体験に基づく社会的スキル尺度の開発, 日本パーソナリティ心理学会, 2015 年 8 月 21 日 ~ 2015 年 8 月 22 日, 北海道教育大学札幌校 (北海道札幌市)

古賀 弥生, 演劇によるホームレスの就労自立支援について, 日本アートマネジメント学会, 2014 年 11 月 30 日, 実践女子大学 (東京都日野市)

6. 研究組織  
(1) 研究代表者

藤本 学 (FUJIMOTO, Manabu)  
立命館大学・教育開発推進機構・准教授  
研究者番号：00461468

(2)研究分担者

古賀 弥生 (KOGA, Yayoi)  
活水女子大学・文学部・教授  
研究者番号：00585101

(4)研究協力者

安達 一徳 (ADACHI, Kazunori)  
大塚 恵美子 (Otsuka, Emiko)